

〈祈りのために〉

「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」。(マタイによる福音書16:26)

荒野の誘惑の中で、悪魔は「この世のすべての国々とその栄華とを見せて」「わたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」(マタイ4:8-9)と誘惑しました。「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」との言葉をもってキリストはサタンを退けます。

そして、同じ言葉で、「そんなことがあるはずはございません」とキリストの十字架を否定するペテロを退けます。そして「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」(16:26)とお教えくださるのです。

エデンの園でのへびの誘惑は「神のように善悪を知る者となる」(創世記3:5)ことでした。神のようになること、つまり、誰からもコントロールされることなく、逆に自分があらゆる人をコントロールすること、それが人間にとって最も抵抗が難しい誘惑だからです。

けれどもそれが誘惑であるのは、実際にはそれが決して人を幸せにするものではないからです。人は知恵の木の実を食べる事によって命の木の実を失いました。知恵を、力を、支配を選ぶことによって、人は命を、喜びを、平安を失ったのです。

それは、「全世界の人口調査をせよ」(ルカ2:1)との勅令を発し、死後に「尊厳ある者」(アウグスト)との名を贈られ、神として崇められるに至ったローマの初代皇帝とその後継者たちの生涯を見る時に明らかです。

神ならぬ者が神として振る舞うとき、どのような悲劇と悲惨が人と世界を襲うことになるか、人はそれを知りつつ「全世界をもうけ」ようとする誘惑から逃れることができません。

だからこそキリストは世に来てくださいました。「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」(ピリピ2:6-8)と証しされている通りです。

神様によって造られた私たちの命は私たちが造られたお方のところにこそあり、共に生きるように造られた私たちの喜びは、隣人と共に生きることにこそあるからです。

神を愛し人に仕える時にこそ、人は本当の意味で自由であること、与えられた命を本当の意味で生きることができていることをイエス・キリストは教えてくださいます。この命に生きたいのです。

〈祈り〉 父なる神よ、神ならぬ者が神となろうとする誘惑、神ならぬものを神としようとする誘惑から私たちを守って下さい。
(芳賀繁浩：豊島北教会牧師)

新シリーズ開始 『その時に備えて Part.2』を読む(1)

井上 豊 (広島長束教会牧師)

Q1 なぜ天皇のことを、教会が問題にするのですか？

A キリスト教会の信仰が、振るわれるからです。そうは言っても、天皇が直接教会の信仰や活動に関与したり、介入したりすることはありません。しかし、天皇の影響力を利用して、キリスト教の価値観が否定されたり、日本の宗教的な風習が強制されることがあります。

かつて、日本が行った戦争は、天皇の名によって始まり、天皇の名によって終わりました。しかし、実際に戦争を行ったのは政府であり軍部でした。つまり権力者たちは、天皇の影響力を利用して、人々を戦争に向かわせたのです。そして、戦争に反対する人々や、権力者にとって都合の悪い人々を、天皇に逆らうものだと決めつけて、弾圧しました。

戦争中の教会は、こうした権力者たちの目に留まらないようにするため、キリスト教信仰は天皇を崇敬するものだと言い、そのことを表す神社参拝を行いました。このように、教会の信仰は振るわれたのですが、本当に天皇を崇敬していたキリスト者が多かったため、何が神のみこころに適うことかを考えることをせず、戦争協力を行ったのでした。

戦後の教会は、こうしたことを反省して悔い改めましたが、私たちは弱く愚かなものです。目を覚ましていなければ、同じ過ちを繰り返してしまいます。天皇について考えることは、この国で神のみこころに適う歩みをしようという、願いのあらわれです。

新 Q1-1 「キリスト教会の信仰が、振るわれる」というのは、どういうことでしょうか。

新 A1-1 これは日本語としてあまりなじみのない言い方ですが、「毒麦のたとえ」(マタイ福音書 13 章 24—30 節)がその説明になっています。畑の中で本物の麦と毒麦の根がからみあっている時、農民が毒麦だけ引き抜こうとすると本物の麦まで引き抜いてしまうことになるので、両方を育つままにしておき、脱穀のあとに毒麦をより分けました。このように、天皇に対する一人ひとりの信仰者の態度が正しいか間違っているのか、見分けることが難しいのですが、それはのちの日に、神のみ前で明らかになるでしょう。

新 Q1-2 「かつて、日本が行った戦争は、天皇の名によって始まり、天皇の名によって終わりました。」について説明して下さい。

新 A1-2 1931 年からの十五年戦争は宣戦布告なき戦争で、天皇の名によって始まったとは言えません。しかし 1941 年からの太平洋戦争は昭和天皇の詔書を受けて開始され、1945 年の終戦も天皇の詔書によって終わりました。昭和天皇

には少なくとも開戦の責任がありますが、天皇の影響力を利用した権力者たちの責任もまた甚大です。

新 Q1-3 戦争中の教会は本当に神社参拝を行ったのですか。

新 A1-3 旧日本基督教会出身の富田満牧師は、1941 年に成立した日本基督教団の統理として、伊勢神宮を参拝しました。

「今、靖国神社の大祭を迎え、我等日本基督者の血は、厳粛な感激と殉国の良心にたぎり立つを禁じ得ない。」、これは教団新報 2490 号(1944 年)の記事です。

これ以外のことは、推して知るべしです。

新 Q1-4 戦争中のことについて戦後の教会が反省して、悔い改めたというのは本当ですか。

新 A1-4 そうであれば良いのですが…。

反省や悔い改めが本当なら、次に戦争の危機が迫ってきた時、平和のためにたたかうことをいとわない、筋金入りの信仰が生まれるはずで、そのことを切に願っています。

国会議員の皆様

「重要施設周辺及び国境離島等における土地等の利用状況の調査及び利用の規制等に関する法律」（土地利用規制法）の撤廃に尽力して下さい

2021年6月15日に成立した本法は、国家安全保障上重要な土地、つまり、基地や原発の周辺地域、国境離島において、国家が土地所有者の活動を恣意的に規制できるだけでなく、地権者やその関係者に関する様々な情報を提供させることができる、二年以下の懲役若しくは二百万円以下の罰金を伴う法律です。つまり、国家が個人の生活に干渉・侵害できると同時に、周辺住民が相互に監視し合って情報提供の義務を負う密告システムを駆動しうる破壊的な法律です。

この法律では、国が必要と認めた場合、土地を収用することができる手順が示されており、かつて沖縄で行われた「銃剣とブルドーザー」による土地の強制収容をまざまざと想起させます。また、基地や原発の周辺、離島に土地をもつ人々による「機能を阻害する行為」も処罰の対象になっており、基地や原発に反対する平和運動自体を監視し、処罰することが目的ではないかとも考えられます。解釈によっては、日本に住む全住民がこの法律による監視・処罰対象になり得ます。

そもそも、基地や原発の存在自体が、地元住民に対する脅威なのであり、かつ国際紛争の火種になるのであって、政府は基地の撤廃と原発の廃炉にこそ注力しなければなりません。私たちは、この法律が、普段から恐怖と抑圧にさらされている危険地域に暮らす人々に追い打ちをかけるものであり、地域社会の分断を推し進め、平和を実現するための国際的な信頼関係を損なうものであると危惧します。

日本キリスト教会は、戦時中、沖縄の教会と人々を見捨て、戦後も米軍の占領下にあった沖縄の人々と苦悩を共有しなかった反省に立ち、辺野古をはじめとする沖縄における基地建設に断固、反対する立場をとっています。さらに原発事故の被害と恐怖のもとにある東北の人々と痛みを共有するとともに、核の脅威を身に帯びている民として、核兵器と核エネルギーの放棄を願うものです。

したがって、私たちは、即刻、本法律を撤廃し、憲法の前文に高らかに謳われているごとく、「われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのない」ように、国会議員の皆様に努力していただきたいと願ってやみません。

2021年6月15日

日本キリスト教会大会靖国神社問題特別委員会委員長 小塩海平

*なお、沖縄伝道所の川越牧師から、次のコメントを頂きましたので紹介します。

地元にいる私たちにとって、これから何が起こるか、辺野古テントが破壊されるであろうと心配です。今日、安和で一人で基地建設阻止行動をしてきました。沖縄は緊急事態宣言中なので、オール沖縄で阻止行動は取りやめており、個人で行動しています。今日は、安和では5人で阻止行動をしました。工事はどんどん進んでいます。それでも、少数の行動者であっても、1000台のトラックの予定が800台となっていると聞いています。少しでも工事を遅らせたいとして、行動しております。 川越 弘

<ヤスクニ問題関連ニュース>

○諸国民への信頼 憲法の礎 (牧師 井上豊)

「世界は日本国憲法の理念通りか？」(4月30日)の疑問に答えたい。投稿された方は憲法前文「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」に表れている理念について「人間の善意、良心を信じていることが根本になっていると思う」とされた上で「善意、良心のみで成立する世界は、わたしには考えられない」と表明されている。

確かに国際社会の厳しい現実を目をつぶったままの理想論では、説得力を持ち得ないだろう。だが、憲法前文を注意して見てほしい。そこにあるのは「諸国」ではなく、「諸国民」なのだ。

国を信じたために、裏切られることがある。戦争を起こすのは国なのだ。しかし、どんなに恐ろしく見える国であっても、そこにいる大多数の普通の人々は、命を奪い去る戦争より平和な暮らしを愛しているという点で、私たちと何ら変わりはない。だから、そこに信頼するのだ。

国と国を超えた「民」同士の連帯こそ、世界平和への確実でもっとも現実的な道である、と憲法は説いていると思う。(朝日新聞大阪本社版:2021.5.28)

○「核使用の結果 沖縄消えても」

核戦略専門家ダニエル・エルズバーグ氏(90)が朝日新聞のインタビューに応じ、1958年の第2次台湾海峡危機をめぐり、米国が中国本土への核攻撃を真剣に検討していた様子を証言した。

——米ソの核戦争に発展する可能性があったのか。

「今、当時を振り返れば、ソ連のフルシチョフ(第1書記)は『中国に全面的に味方してあらゆる兵器を使う』と公言していたが、実際にはそう

行動する可能性は極めて低かったと思う。中国の毛沢東(国家主席)も、米国との武力衝突まで発展させる意図はなかった。しかし、キューバ危機では、フルシチョフもケネディ(大統領)もどちらも武力衝突を行う意思はなかったにもかかわらず、全面戦争に発展する間際にあった。第2次台湾海峡危機でも、その可能性は十分にあった。米側は核の先制使用の結果、台湾や沖縄が消え去っても受け入れるつもりでいた」(朝日新聞:2021.05.30)

○A級戦犯 太平洋に散骨

第二次大戦後、極東国際軍事裁判(東京裁判)で死刑判決を受けた東条英機元首相らA級戦犯七人の遺骨について、米軍将校が「太平洋の上空から私がまいた」と記した公文書が見つかった。米軍による具体的なA級戦犯の遺骨処理の方法が公文書で判明するのは初。遺骨は遺族に返還されず、太平洋や東京湾にまかれたとの憶測はあったが、行方は昭和史の謎とされていた(東京新聞:2021.6.7)。

○「私的参拝だ」沖縄の陸上自衛隊トップ、日本軍の司令官まつる黎明の塔を参拝

沖縄の陸上自衛隊トップ、佐藤真第15旅団長ら幹部3人が慰霊の日の23日午前5時前、日本軍の牛島満司令官らを祭る糸満市摩文仁の黎明(れいめい)之塔を参拝した。沖縄戦で住民を虐殺した日本軍を自衛隊が顕彰することに批判が続くが、佐藤旅団長は「私的参拝だ」と説明を避けた(沖縄タイムズ:2021.6.23)。

798号ヤスクニ通信 2021年7月11日

発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会
発行人・編集・発行 小塩海平(東京告白教会)

<編集後記> 私の研究室で修士課程に在籍しているミャンマー人留学生がCDM(市民的不服従運動)に参加しているという理由で国立イェンジン大学の助手の身分を剥奪されてしまい、私も遅ればせながらジーン・シャープの『独裁体制から民主主義へ』を読み始めました / 2面は『いまなぜ大嘗祭か』(日本基督教会靖国神社問題特別委員会、1989年)に引き続き、『その時に備えて Part2 —天皇代替わり Q&A』(日本福音同盟社会委員会、2018年)を読むことにしました。乞うご期待。(小塩海平)